

ITU-Rのこれから

国際電気通信連合 (ITU)
無線通信局長



ヴァレリー ティモフィーエフ
Valery Timofeev

学ぶことの多い日本ITU協会の活動

私どもは日本ITU協会の活動をずっとフォローさせていただいております。電気通信、特に無線通信に関する活動は素晴らしく、またそれが正しく分析、公開されていることを十分承知しております。貴協会季刊誌である『New Breeze』を読ませていただき、自分たちの決定が正しかったかどうか、我々も絶えず確認させていただいております。

ITUクラブでは、公式なディスカッションに加え、親睦も含めた交流がされているとのこと、大変素晴らしいことだと思います。私もITU-R局長になる前、モスクワでは、名前こそ「テレコムフォーラム」と違いましたが、同じような目的の会合を開いておりました。

参加メンバーも、オペレーターをはじめ、産業界の方たち、それもロシアに限らず、海外からも集まっていたわけですが、いま何が重要な問題なのか、その感触をつかむという点で、非常に有効な会合でありました。公式のプレゼンテーションよりも、むしろその後の意見交換の場が重要な意味を持つということです。

これからのITUが組織として求められるもの

今年の5月、ITUは140周年の記念行事を行います。これまで、万国電信連合創設、国際電気通信連合創設、それから最初の全権委員会会議開催というように、ITUにはいろいろな経緯がございました。来年は無線通信局開局100周年記念ということで、これも輝かしいお祝いになると思います。

なぜこの組織がこれだけ成功しているのか、長い歴史を持ちながら、同時に活動が若々しく活発であるのはなぜかと言

いますと、それは、組織の移行がうまく行われ、必要な時期に、その都度、発展を遂げてきたからであります。

ITUでは、現在、部局、事務総局ということではなく、ITU全体の話として2つの具体的なイベントが計画されています。1つは、チュニスで行われるICTサミットの第2フェーズ、そして、もう1つは、2007年に開催される全権委員会会議です。この2つのイベントにおいては、各国の主管庁、オペレーター、業界関係者からの新たな要請があると思いますし、技術革新に対しても、更なる対応力が求められると思います。

同時に、ITUの内部の状況としましては、ITUが100%満足できるものなのか、90%、あるいは50%程度の満足しか得られない組織なのかということを検討する必要があります。パイロットが着陸するのか、もう一回りするの迷うときと同じですが、我々にとっては次の全権委員会会議こそが決断の時期だと思います。

また、比較的古い時期からスタートしたITUリフォームにつきましても、可能性についてどんどん議論を続けていくのはいいですが、ただ段階的に、1回目、2回目と決断をしていくということではなく、本当の意味での決断が必要な時期になってきていると思います。砂糖も何度も口にしていると、そのうち、口は甘いものを感じなくなってしまうということです。実行することなく、ただただ「ITUリフォーム」と繰り返し言ってもポジティブな結果は生まれません。

セクターメンバーの地位を向上し、ITUの活動をより効果的に

そういう意味では、セクターメンバーの役割というのが重要になります。個人的な意見として、私はセクターメンバーに法的地位を与える必要があると思うのです。もちろん、政府間の働きというのは極めて重要であります。しかし、セクターメンバーの地位をまず高めなければいけないということがあります。

私のこうした意見に関しては、反対意見の人も多いと思いますし、私どもの政府でもこの意見を支持しないかもしれません。しかし、こういう問題について我々全員が真剣に考えるときが来ているのです。具体的に、ある程度の革新的な解決策を次の会議までに考える必要があると思います。

ITUで様々な改革が行われていくなか、無線通信部門は、組織の中で引き続き重要な位置を持ち続けることでしょう。今後ともよろしくお願いたします。

(3月7日 第337回ITUクラブ例会より)